

第2回 観光振興審議会（令和6年11月6日）

【事務局】

本日はご多用中のところご出席いただきまして、ありがとうございます。司会を務めさせていただきます、観光文化スポーツ部観光課グループリーダーの古川と申します。よろしくお願いいたします。

それでは只今より、令和6年度第2回八戸市観光振興審議会を開催いたします。

まず、本日の資料の確認に入ります。座って説明させていただきます。

お手元にお配りしている資料でございますが、次第、委員名簿、席図になります。

次に説明資料として、

- ・前回審議会の意見の確認
- ・目指すべき姿のイメージ案について
- ・基本方針と数値目標について
- ・データに関する意見の確認 となります。

次に参考資料といたしまして、

- ・第1回観光振興審議会の発言の要旨
- ・日本版持続可能なガイドライン JSTS-D の取り組み項目
- ・釜石市さんがゴールド賞を受賞した記事
- ・スピードスケート国際大会に係る外国人来訪者について
- ・水素導入ビジョンに係る記事
- ・八戸十和田トレイル（仮称）について、イベントチラシと試験開通までのスケジュール
- ・DMO 登録要件見直しに関する記事
- ・第1回の観光振興審議会の新聞記事1枚 となります。

資料の漏れなどございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

次に、会議に先立ちまして、出席委員についてご報告いたします。

まず、八戸学院大学の井上副会長になりますが、講義の為 30 分ほど遅れての参加となります。渡辺委員については、のちほど会議に参加するということで、本日まで出席いただきました委員の方はオンラインでの出席者も含めまして、12 名全員となりますので、八戸市観光振興審議会規則第5条第2項の規定により、本会議は成立しておりますことをご報告いたします。それでは早速ですが、審議に入りたいと思います。

進行は会長の阿部様にお願いしたいと思います。それではよろしくお願いいたします。

【阿部会長】

皆さん、お疲れ様でございます。審議の進行を務めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

します。それでは、早速審議に入りたいと思います。次第の「2.前回の審議会の意見の確認」について、事務局より説明をお願いいたします。

【事務局】

観光課の小関です。どうぞよろしくお願いいたします。

前回の審議会からちょっと期間が開きましたので、内容を思い出す意味でも、前回の委員の皆様意見を抜粋させていただいた資料を作成しておりますので、そちらをご覧くださいければと思います。

左上に「2.前回審議会の意見の確認」とついている、2枚ものの資料ですが、こちらの方は前回の委員の皆様からいただいた意見を抜粋させていただいたものになりますので、確認の意味で何個かピックアップさせていただき、読み上げたいと思います。

③観光庁の来年度の予算の概算要求について、「持続可能な観光」についての予算が対前年で2.4倍くらいになっており、観光振興プランの中でも持続可能な観光が必要だと思っている。

④お客様が八戸に来ることによって、地域消費額が上がる、あるいは関係している事業者に利益が及ぶような取り組みを強化していきたい。

⑦持続可能性の中でも、文字通りサステナブルツーリズムに注目している。

⑧欧米を中心とした方々が、生態系とか、CO2を出さないというところでサステナビリティに配慮している商品、サービスを買うという傾向がある。日本においても、Z世代は意識としてそちらの方が高いというところがあるので、そういった方向でまだ誰もやっていないことを八戸でやれるというようなところをできたら素晴らしいと思う。

⑩交流人口のところで、市民の方と観光客の方が繋がると、市民の方の幸福度が上がるというところが一番大切だと思う。それを観光という機会で、実施できればと思っている。

⑪プランを作るということにおいて、八戸ならではのとか、八戸の観光に対する意気込みみたいな、どんな観光を目指しているのかが、ある程度伝わるようなものにしていくべきではないかと思っている。

というような意見がございました。2枚目の方に移りまして、

⑱インバウンドに関して、事業者の方々にいかにやる気を持ってもらうか、やる気のある方をいかに支援して活躍していただくか、その辺のプレイヤーの部分の可視化、活性化も大きな鍵だと実感している。

⑲観光で売るなら事業者だけでなく、市民の皆さんが、観光で食べている、観光って儲かるいいことなんだという意識を作ってあげないといけないと思っている。

㉑市民の方がお互い観光客と繋がって存在を認め合うというような、市民参加型の観光を東北の中で作っていくべきだと思うし、八戸市では市民の今までの生活文化が観光コンテンツ

になり得ると思うので、その辺を是非切り口として一緒に作り上げていきたい。

②③市民の参加、共感が一番必要だと思いますので、観光消費額であったり、その中でも域内調達率、どれだけ市の経済に観光というものが寄与していくかを可視化する、見える化するのが必要。

②⑥八戸の魅力は人だと考えている、魅力になっていくような人を今後どう育成していくのか、人材育成の仕組みというものも考えていかなければならないと思う。

こういった意見が前回の審議会の中で出ておりました。今回、委員の皆様のほんの一部の意見を抜粋させていただきましたが、お配りしている参考資料1の方には、皆さんの意見をもう少し詳しく載せた資料も準備しておりますので、後ほどご覧いただければと思います。以上で、資料の説明を終わります。

【阿部会長】

前回の審議会の中での抜粋した内容を事務局の方から説明いただきましたが、確認していただいて、皆様の方から違う点とか、抜けているような部分などについて、何か気が付いたところはないでしょうか。オンラインで参加の河東委員さんと村山委員さんご意見とか、よろしいでしょうか。

【オンライン参加 お二人とも】大丈夫です。

それでは、前回の意見の確認については資料の通りということで、次に進めさせていただきます。続いて、次第の「3.目指すべき姿のイメージ案」について、事務局より説明をお願いします。

【事務局 下村次長兼観光課長】

観光課の下村です。私の方から説明させていただきますが、まず、次第の3とは少し関係ないですが、前回の審議会で、審議会の開催回数が4回では足りないのではないかという意見がございましたので、4回を6回に、形式につきましては、このように全員参加型になるのか、何かしらに特化した集まりになるのかは別として、2回の追加で今年度考えております。次第の中身につきまして3、4と私の方で一括して説明させていただくのですが、目指すべき姿であるとか、基本方針、数値目標等についても、具体の文言を今日決定というよりも、第1回目を踏まえまして、何かしら幅広い意見や視点といったものを皆さんからいただいて、より具体のたたき台になるようなものを第3回で皆さんにお示しして進めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。それでは、着座にて説明させていただきます。資料にページもふられていなくて分かりにくい点もあるかもしれませんが、はじめに、目指

すべき姿のイメージ案について、前回の意見の確認の次のページになりますけれども、3、4と併せて説明させていただきたいと思います。それでは、3の目指すべき姿のイメージ案についてなんですが、まず、前回の審議会の皆さんの意見を拾い上げまして、3項目を挙げております。

一つ目には持続可能な観光、持続可能、またはサステナブルという言葉につきましては、非常に広い意味を持つものではあります。前回高橋委員の方からは、特に生態系であるとか、CO2を出さないというような視点のツアー等々の意見をいただいております。そして二つ目に、事業者が儲かる、稼ぐ観光、いかに事業者にやる気をもってもらうのか、このことに関連しまして、観光消費額であるとか、域内、エリア内の調達率を意識するという意見を複数の委員からいただいております。そして三つ目は、市民の方の幸福度、市民の参加、観光に関する参加、共感、人との関わり、交流を生む観光という、八戸で観光をなぜ取り組んでいくのか、また、八戸ならではの観光を進めていくのか、市民の方々からの理解やまちぐるみでという点につきましても、それぞれ発言された言葉、文脈に違いはあれども、複数の委員からこの点も意見をいただいております。

この3点の意見として出されましたキーワードにつきましては、4の基本方針、数値目標の議論の際も念頭においていただきながら意見を頂戴したいと思っております。そして、この3点を踏まえますと、目指すべき姿のフレーズ、キャッチコピーに入れ込む要素といたしまして、この文章でいくということではなく、一つのセンテンスにしますと、観光に配慮した観光都市であるとか、多様な歴史と文化を活かした文化観光、また、観光を市民の生活の幸福に繋げるといった姿をイメージさせるものになるのではないかと、事務局の方でまとめたものです。最後に、他都市の例を(1)～(5)まで挙げております。

続きまして、4の基本方針と数値目標案について、ご説明させていただきます。先ほどのキーワードを踏まえまして、三つの基本方針、キーワードを案として挙げております。①として、持続可能な観光を確立し、環境保護、地域経済の発展、地域文化の保全、文化観光の推進を進める。そして②として、地域の事業者が稼ぐ観光を目指し、観光消費額を拡大する。③として、観光振興により市民の幸福度を高める。

続いて、他都市の基本方針、ビジョン、また数値目標を参考に挙げております。(1)の青森県庁、青森県の場合ですと、表の右側、三つの数値目標の他に参考指標として、平日の宿泊率など4項目を挙げております。(2)の函館市の場合ですと、表の左側のビジョンで、例えば③の観光を盛り上げる人を増やす、④観光への市民理解度を促進するなどを挙げ、これに関連する数値目標として、③函館観光に関する取り組みに参加する市民の増加、また④の、観光の理解度の向上ということを挙げております。なお、(3)、(4)の十和田市、盛岡市なんですが、例えば十和田市などではビジョンとして②のサステナブルな観光地域づくり、また③の上質な観光サービスを挙げ、(4)の盛岡市では、①魅力向上、②認知度向上を挙げております。

この両市におきましては、数値目標としては十和田市の④リピーター率などの他はビジョンの達成を具体的に数値で示すような数値目標は示されていないと拝見しておりますが、もしかしたらこれにぶら下がる事業、事業成果というものを一つの KPI にしているのではないかなと思っております。事務局の方では、まずはこのようにまとめさせていただいております。最後に、(5)の川越市なんですが、川越市のビジョン、中々おもしろい点がありまして、③として、安心して観光を楽しめる環境をつくる、④として地域全体で観光まちづくりを進める、などを挙げ、数値目標としては、⑥の観光地立ち寄り箇所、⑧市民の観光に対する重要度を指標として挙げております。なお、数値目標につきましては、参考資料の方に、既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、観光庁が DMO の認定基準を新たに示しており、認定基準を示す中で、DMO と自治体の観光プラン、また基本計画の数値目標等は、そもそも目的であるとか、数字の意味合いは違ってくるのかもしれませんが、目標とするような、似たような単語になってくるんだらうかと、参考までに挙げております。それでは、資料をもう一度、4 の基本方針と数値目標案という他都市の参考事例の前のページのところに戻っていただきますでしょうか。ここで説明すると話が広がるかもしれないのですが、①の持続可能な観光を確立し、というところにアンダーラインを引かせてもらっており、そして参考資料の方にも載せているのですが、前回の審議会でも釜石市の取り組みにつきまして、河東委員の方から、サステナブルというキーワードが出てきた際に少し紹介がございましたが、先日、釜石市の取り組みがゴールド賞を獲ったという動きがあったようです。こちらについて河東委員の方から、持続可能な観光というところに関連しまして、観光ガイドラインに関する釜石市の取り組み等について、少しご紹介していただければと思うんですが、河東委員の方はよろしいでしょうか。

【河東委員】

はい、持続可能な観光とよく言われているところがあると思うのですが、取り組むべきか取り組まないべきかといったら、やっぱり取り組んでいくのがグローバルスタンダードなのだろうと思います。今回簡単に、釜石でどうして持続可能な観光というものに取り組んできたのか、その経緯、目的、どんな取り組みだったのかという内容、そして成果を簡単にお話いたします。参考にいただければと思います。

まず経緯は、釜石が持続可能な観光をはじめるとするのは、端的に言うと釜石がこれまで観光地ではなかったので、どう観光を進めていけばいいのかやり方がわからなかったんです。それがスタートになります。2016 年に持続可能な観光ガイドラインというのが国際基準でできまして、ちょうどそのときに考えていた観光振興ビジョンにマッチしたので、どうも海外にそういうのが出来たらしいということで、それを進めていくことが復興の総仕上げになるのではないかとこのところから始まっています。目的でいうと、復興の総仕上げのために、

鉄は冷えていくし漁業も厳しくなってくるし今後どう外貨を獲得していくかという部分で、国策である観光を伸ばしていく。DMO を各地で作ってくださいと観光庁が言っている、そういう中でどうやっていくか、持続可能な観光ガイドラインというのが 100 項目くらいあるらしいが、そういうのをひとつずつやっていけば観光地になれるんじゃないかというところから、スタートしています。

内容につきましては、とりあえず持続可能な観光ガイドラインの国際基準だとやっかいな部分もあるので、まず話題に上がっている日本版のほう、JSTS-D、こちらのほうが取り掛かりやすいので日本版から始めるというのを、私はいつも問い合わせがあった場合におすすめしています。どうしてかというと、JSTS-D のほうが日本として取り組みやすい内容になっているんです。国際版だとアマゾンの奥地とかアフリカの原住民がいるところとか野生動物とかやりにくい部分も入ってきたりするので、解釈も難しいので、まず日本版でやったほうがやりやすいという部分があります。我々がどういうことをやっていったかということ、その頃まだ日本版はありませんでしたので、この国際基準の項目ひとつひとつについて○×△をつけていくということになります。実際は、こういった観光地系に関する基準があるかとか、基準を進めていくスケジュールがあるかとか、実際にそれをスケジュール通りに進めているチェック機能があるかとか、チェックしている人がいるかとか、そういう ISO 的な内容になっているんですね。ですので、現時点で八戸でこの基準に○×△とつけていくと、結構○がつくんじゃないかと思います。まずは基準があるかみたいところから始まりますので、そういったものをつけていく。それが適切な、持続可能な観光ガイドラインのベースになるものというのが観光だけではなくて、観光によって地域経済を活性化するとか、環境を守るであるとか、文化を維持するとかそういった部分にも配慮してくださいとなるので、項目が社会経済にどのような取り組みをしているかとか、文化面配慮していますか、環境保全していますかという投げかけがあってそこを埋めていくわけですから、それも○×△をつけていくとうまく全体が構成されていくというものになっています。

成果とすると、どういう成果があったかということ、釜石で今何が出来ていなくて何が出来ているのかというのがステークホルダー感でわかるようになっているということなんですね。DMO の中でも自分たちがこれをやるあれをやるというのが、今年はこれが出来ていないからこれをやろうかという目標がわかりやすくなってくるので、毎年ひとつひとつ埋めていくことによって7年間をかけてようやくゴールドになっていったというところなんです、今年はこれをやろう、たとえば障がい者のツーリズムの参加とか、ひかりないというのですが、光が必要以上に外に漏れているのを是正していくとか、そういうのを例えば DMO の代表である私が言っても説得力がないですね。それよりはこういう基準があってここが第三者から ABC とある場合に C をつけられてしまっている、これを B にしましょうというのが地域に対して説得力がある。第三者からどう見られているのか、ここを伸ばすというすごく簡単

な内容かなと思います。そういったものができていけば全体が良くなる。そして JSTS-D が、持続可能な観光ガイドライン国際基準に取り組んでいればそれで外国人がすごく来るかといわれると、正直来ないと思います。それ自体では来ないかなと思います。じゃあなんのためにやっているかという、それを続けることで地域での受け入れ態勢が整ってくるんですね。ですので、コロナが明けた後、八戸市さんもそうかもしれませんが、観光客の受け入れがぐっと伸びているんですよ。そういうのは受け入れ態勢ができていたりとか、やっている企画がよくなるとか、人材が集まるであるとか、そういった効果があって結果として受け入れている人数が伸びているというところだと思います。あくまで持続可能な観光の取り組みは衛生要因というんですかね、来る人にとって普通のことであって、特に外国人、ヨーロッパ系は、必ずしもモチベーションにならない。やっているから来るというわけじゃなくて出来ていて当たり前という感じがあります。注意しなければならないのは、あまりここでは持続可能な観光をすごくやっていますという、何かマイナス要因があったりするとこれは出来ないじゃないかと反発があったりするんですね。そもそも日本に來ること自体が飛行機で二酸化炭素をずいぶん出しているよねということを言う人がいたりするので、出来る範囲でやっているという感じの出し方が一番いいかなと思います。

釜石でも、そんなにやっているとは出していないんですよ。逆になると逆バズリが起きてしまうので、地域をまとめるための材料に使っているということになります。

すごく簡単になりますけど、こういった取り組みだということで、あとはご質問お受けしますけれども、一方的に話してしまいましたので、こちらでマイクを戻します。

【事務局 下村次長兼観光課長】

今、河東委員さんからの意見もありましたけれども、私からの説明は以上にしまして、この 4 の基本方針と数値目標は 3 つを挙げておりますが、前回の会議で出た項目からいくと、この 3 つになるのだろうということで、先程説明しましたとおり、他都市の例を見ましてもこの 3 つにこだわらず増やすなり追加するなり修正するなりをしていきたいと思っています。本日はこの点につきましても広く、今後検討するためのご意見をいただければと思っております。私からは以上です。

【阿部会長】

ありがとうございます。

事務局から 3, 4 について説明はありましたが、前回のご意見を踏まえた中でまとめたということですが、本日もこれに縛られることなく再度思うところとか、各委員の皆様からご意見をいろいろ頂いて、またそれを次回の素案に事務局のほうで絞ってまた協議していきたいということですので、各委員さんから思うところご質問あればそれを頂きながら進め

ていきたいと思います。

最初に会場にいる委員さんから順次ご意見いただいきたいと思います。前回も名簿の順番でご意見をお聞きしましたので、大矢委員さんからお願いいたします。

【大矢委員】

今回、前回に引き続きまして参加させて頂いております。今回、基本方針と数値目標案ということでキーワードを出して頂いているところで、ここの部分で私自身気になった点としては、インバウンドをはじめとした観光客の方々にどういう観光を楽しんでもらいたいのかというキーワードが抜けているのかなというところがあります。他都市の事例でいくと、盛岡であれば歩いて楽しむ街とか、川越市であれば安心して観光を楽しめるとか、利用者目線の部分でのキーワードがあったほうがいいのではないかと、気づきとしてございました。

あと数値目標というところはこれから議論を深めていくところだと思うのですが、私自身、宿泊事業に携わっていることからデータの取り方、素データというものをどうやって取っていくのかなと思います。現状いろいろやっつけらっしゃると思うのですが、その数字の取り方は気になっている部分でして、特に宿泊事業、ホテルをはじめとした宿泊施設というところはお客様が定点でいらっしゃる場所ですので、多くの情報をお持ちですし、取れるものがたくさんもっとあるのではないかと考えております。参考指標にある宿泊者数とか宿泊の消費単価、連泊率、これだけでは多分足りないと思います。外国人の方向けの番組で「YOUは何しに日本へ」という番組があるじゃないですか。あの番組大好きなのですが、あの視点を宿泊事業者の方に持って頂ければ、どこから来たの、何を見てきたの、どこにこれから行くの、あるいはこれからどういった体験をしたいの、などというように、能動的にデータを取りに行くというのが事業者の方でもっとあってもいいのかなと思います。それが素データとなって、そこからいろいろな二次加工・三次加工と生きてくるのかなというところはあります。もちろん事業者様だけではなくて、主要観光スポットであれば館鼻の朝市ありますよね。アイデアですけども、朝市会場にひとつ大きなボードを作ってどこから来たのかというのを外国人の方にシールを貼ってもらうだけでも、周りの市民の方々はいっぱい来ているのだなど、機運としても高まったり、外国人の方も自分たちが受け入れられてという気持ちになったりすると思いますので、そういうコーナーを織り交ぜた形のデータの取り方というものあってもいいのかなと思います。朝市は特に、市民の方が、外国人の方がたくさん来ているというのを知っている状態だということであれば、どういう人が来ているのか属性を語れる方はまだまだ少ないと思うので、なんとなくアジア系が多いというのは肌感覚であると思いますけれども、ある程度属性としてまずは発信できる状態というのがいいのではないかと思います。私からは以上です。

【阿部会長】

ありがとうございます。

齋藤委員さん今回初めてなんですけれども、いろいろ県からの立場もあって何かありましたら、お願いします。

【齋藤委員】

齋藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

前回は大変申し訳ございませんでした。来たくてしょうがなかったんですが来れなくて申し訳ございません。

まず今回の審議会としては行政が方向性を出していくものなんだと思っています。私自身も先般観光の大きな、町田先生にお力をお借りして作りましたが、やはり私が県全体の中で見ていると、本県に来られているお客様を見ていると、美しい日本を見に来ています。それから青森県は、日本の様々な失われているものがまだ残っている、そこを非常に感度の高い人たちが興味を持って見に来ていただいています。お墓の前で墓獅子をやっているところだとか、そういうことなんだと思います。いたこ、おしらさま、そういった残っているものがたくさんあって、風景も同じで、まだ原風景がしっかり残っていて、日本が持っている本当に美しいもの、豊かなものがまだ残っていて、それは食の中にも手仕事の中にもあったり、そういったものを大事にしていける、八戸ってそういうところだと思っています。

それで次から私見でございますが、今回の目指すべき姿を市として出すにあたって、ぜひ種差の振興を入れてほしいと思っています。今日も八戸の駅に降りました。八戸の駅は、奥入瀬溪流に行く玄関口です。インバウンドの玄関口です。外国人が八戸の駅にいてバスが来るのを待っています。つまり、八戸の駅から西側に行けば奥入瀬溪流、東に行けば名勝種差海岸。この二つ、八戸というのは大きな真ん中において、それは八戸線で結ばれています。お休みはもちろん八戸の街中で当面はしていただくのですが、ぜひ今ある、吉田委員の前で言うのもあれですが、ぜひ種差（海岸）駅を終点にして、できなければ鮫スタートの種差スイッチバックで、そうすると何回も往復できる。そういった人の動きと八戸の観光地を結び付けていく大事な路線としてこれからもいきますし、それができてくれば外国人の手荷物どうするんだとか、バゲッジがホテルからまっすぐ八戸の駅に行って人だけ種差海岸へ行くようなことであったりが出来てくれば、次のことが課題になってきます。そして観光地は当然保全されていくべきですし、それがうまくいけば街の中に投資が生まれてくる。保全と投資を、消費というもののの中で作っていける場所なんじゃないかと私は思っています。種差自体が持っているポテンシャルと、人の動きが街と結びつけばものすごいポテンシャルになると思います。保全すべきところとしっかりとお客様へ便宜供与するところのゾーニング、そして、文化と歴史がしっかりそこに残せるようなゾーニング、そしてランドスケープ。そういった

ことがちゃんとできてくれば、鮫、陸奥湊、八戸の街の中、そして尻内、ここがひとつに繋がって、奥入瀬溪流とふたつ大きなポテンシャルを八戸が持つことになると思います。青森県の地形は真ん中に十和田八甲田があって、東に八戸があって、西に津軽があって人が縦に行きやすいんですが、横には非常に行きにくい。つまり、3つの道を横に行くというのはものすごいエネルギーが必要です。ただ一個はいけるので、奥入瀬溪流の玄関口にこれからもなっていってほしいですし、JRさんは八戸を下北に行くゲートウェイにするんだといって例の電車を走らせてきたわけですが、こういった尻内が持っている奥入瀬溪流と種差のツールが動き出せばまたもう一度八戸が3つの方向へ行くゲートウェイになれるはずだと思います。そのためにはまずは種差をステップアップ、ステップ1、ここでやってその先のステップ2、ステップ3といくことで2030年2040年2050年には八戸が起終点の中心になりながら、観光の真のゲートウェイになってほしいというお願いを言いに来たということで、非常に、何をどう変えていいのかは審議会の委員の皆様様の議論になってくるんだと思うのですが、夢は叶うはずだと思い込んで発言をさせていただいたという事でございます。以上でございます。

【阿部会長】

熱いご意見ありがとうございます。それでは続いて高橋委員さんお願いいたします。

【高橋委員】

今の齋藤委員のすごくスケールの大きい、風景がイメージできる俯瞰図で見たところのお話すごく参考になりました。キーワードというところで出して頂いた齋藤委員の、慈しみが残っている、手仕事とか風景とか日本の持っていたものが残っているというのがキーワードとしてというか、八戸が持っているものとしてあるんだなと改めて考えさせていただきました。先ほど河東委員のほうから、持続可能なツーリズムの中で釜石がやられてきて参考資料の中にゴールドを7回も取られていてすごいなあと思ったのですが、それで外国人の観光客が来るかという来ない、それでも取り組んでいくところの意義が中の人というか街を挙げての観光そのものの整備に入っていくツールとしてやっていくということでやられていたということで今日参考資料として出して頂いたチェックリストみたいなものがないなあと思っていたので、これも八戸の中で活用しながらできるんじゃないのかなあと思いました。特にみちのく（潮風）トレイルのところは、サステナブルな土地でもあるので、そちらに関して言うと特に力を入れてトレイルの開発には世界基準のサステナビリティを入れていくということには有効なんじゃないかと感じましたので議論をしていきたいなと思いました。

前回お話させていただいたときに、アイデアというか具体的なものがありましたので、これをやりたいということではなくて、参考情報として皆さんに聞いていただければいいなと思いましたので。Zoomのほうって画面共有させていただいてもよろしいですか。

では画面をお借りして、会場の皆さんとオンラインの方も見ていただければと思います。共有権限いただけますか。（高橋委員 画面共有の準備中）

【阿部会長】

委員の皆様から引き続きご意見を伺っていきたいと思います。それでは原委員のほうから、お願いいたします。

【原委員】

ここに基本方針の案ということで、みなさんのご意見からで、その通りだと思って拝見させていただいております。ちょっと気になった点といいますか、情報発信が弱いところではあるので、それぞれでPRをしていると思いますけれども、なかなか成果に現れてきていないと日々実感をしているところもあります。市のほうでどういうところを目指すという方針が決まれば、それに向かって事業者なりにもどういうことを目標にしているので、いろいろなやり方が出てくると思いますし、先程お話いただいた種差というところも、再開発がはじまったりしていらっしゃると思うのですが、そちらのほうにもさらに人が行くような、あとは宿泊だとしますと中心街のほうがどうしても宿泊施設が多く点在していますので、そういったところの回遊性にも繋がるんだろうと思っています。以上です。

【阿部会長】

ありがとうございます。続いて町田委員さんお願いいたします。

【町田委員】

まず、いろんな観点からの質問や意見があるのですが、このプランを作るにあたって今この目指すべき姿のイメージ案というところでお話が出ているのですが、このプラン自体がどういう位置づけのものになって誰が活用していくのかとか、どういう章立て、戦略のところまでいくのかプロジェクトのところまで入ってくるとか、プランのボリューム感だったりとか、今の状態では全然見えないので、イメージを出すにしてもその流れによってどこまでのイメージを出すのかというのが違ってくると思うんですね。そういうところで、どこまでの共有が必要なのか私の中ではもやっとしているので難しいというのがひとつ大前提にあります。このまとめていただいたキーワードの中で、八戸の観光があったら外から固める枠はどれですかというか、今の日本の観光の中で主流になっていることなので、みんなが考慮しないといけないことだと思うんですね。大前提として観光をやるんだったらこういうことを考えていきましょうという基本的なことだと思うのですが、今度はそれに合わせて八戸の現状というか、八戸の特徴というのがあると思うのですが、それとこういったことをどう接点を持た

せて結び付けていくのか、ワードで出てこない八戸ならではのイメージというのも浮かんでこないのかなと思っています。他都市の事例で行くと函館だとテラスだったり十和田は自然とアート、川越市は江戸、きっとその街ならではのイメージを表現するワードが出てきていると思うのですが、そういうものをもう少し出していったら今のキーワードに繋がっていかないと説得力のないものになるのかなと思います。じゃあ八戸の観光として何を一番発信していきたいのか、おそらく意見を出していかないといけないところだと思うんですね。先程齋藤委員のほうから種差などのお話が出てきていますように、八戸は自然と食を売るんだとか、横丁と朝市があるので夜と朝を売るんだとか、八戸の観光として1番売りたいもの、2番3番くらいあってもいいのですが、売りたいところをもう少し出していったほうが具現化しやすいというか、わかりやすいと思います。例えばその一つとして、特に東北は二次交通のことが必ず何かネックで問題になってくるんですけど、比較的八戸はアクセスがいい方だと思うんですね。先ほどのみちのく潮風トレイルにしても、種差にしても本数少ないにしてもJRで行ったりバスも乗り継げたりとか、ポイントを線で繋いでいける、東北の中の八戸の観光であったり、ここならではのもう少し表現した方がいいと思うんです。先程の、ついでにといいます補足に、私がいつも思うのは種差をもっと売っていったいいのではないのか、八戸をハブにして東西でとなったときに、駅も中心街もそうなんですけど、もしそういうものを目指すとなるとバスのルートとかも、バスとかに「種差海岸行き」とあると来訪者はすごくわかりやすいし、これに乗ったら海に行けるんだ、こんなに海感がないのに何十分かバスに乗ったら海岸に行けるんだ、というのもひとつの街のブランドイメージを作る要素になると思うんですね。観光客にやさしい観光地を目指すのか、じゃあそのひとつとしてアクセスもそうだし、それを八戸の特徴として浮き出てきたものを環境に配慮しているんです、とか、文化観光を推進していくんです、というところに繋がっていくと思うんですけど、その中身の部分が文字にでてきたほうがいいのかなと感じています。プラス観光というのも八戸ならではの、私はずっと観光のところにいますので、ぜひ八戸ならではのというインタラクティブな観光があるという、行って訪れるだけではなくインタラクティブにコミュニケーションもそうですし、次につながるような観光が八戸にはあると思うのでそういうものを表現していけるようなものができればいいのかなと思います。

【阿部会長】

今、町田委員のほうから質問と意見という形で頂いたのですが、もし答えられる範囲で結構なのですが、1点目にこのプランのイメージ案を作るにあたっての位置付けとか誰が活用して今後の進め方というところがあったので、答えられる範囲で今イメージしているものがあればお願いしたいと思います。

【事務局 下村次長兼観光課長】

まず全体に対して、前後してしましますが、章立ての部分に関してはその通りだと思っていますので、前回は踏まえたうえで入口の部分に比重を置きすぎた点もあると思うので、章立ての点につきましては、他都市の例を見ながら3回目の審議会を待たずに各委員の皆様にお知らせできればと思っています。そして3回目のときにどういったことを審議していくのか、先程2回増やすといった中で、先程齋藤委員のほうからも種差のことがあって、今日の最後にその種差に消費もそうだけれども民間投資をしていくような環境づくりをしていけばいいのか、環境省の取り組み、八戸十和田トレイルに触れながらそういう会を一回は設けたいということを皆様にお知らせしたいと先程考えていました。また観光の位置付け、自然と食のところにしても認知度調査を、前回も言いましたけれど八戸で知っているのは自然と朝市、特に食です、というデータが出ているという話をしましたけれど、特徴だてのところも早々に皆さんのところにお示ししたいと思います。

ご質問のあったプランの位置付け、活用につきましては、先程齋藤委員からもあったとおり県のプランにつきましては毎年県のほうではその年の予算とプランとの関係、その達成率等を発表しているのですが、八戸市は今回プランを立てるにあたって5年計画という中でアクションプラン、それにぶら下がる事業も皆様から意見を聞きたいと思っていました。KPIを毎年確認して報告して何が達成できなかったのか、皆様にはお諮りしてない考えになるのですが、観光統計などは翌年度に発表するのですが、できればホテルの松橋さんとも相談しながら、何かしら速報値のようなものを四半期ごとか半年ごとか、八戸市の規模だったら発表できるんじゃないかと思っております。ですので後半はホテル協議会の観点を入れながら、実はえんぶりの入れ込みはいいので、後半は前年ベースになるだろうかと、それをオープンにするような場があればなと思っています。これも先の話になるのですが、それを作ったときのチェックはどうするんだということも踏まえて、この審議会の任期等も含めて、皆さんと相談しながらやりたいと思うのですが、毎年毎年のチェックを果たしていくものにしたいと考えています。また、市の総合計画の中で観光振興プランの位置付けというのは、今まで実は観光振興プランというのがなかったので、ちょうど総合計画見直しの時期が来年度はじまりますので、観光課としては、現在の総合計画より大きく観光振興プランという位置づけを明記していくようにしたいと考えています。まずは作っただけにしないアクションプランにしていきたいということで、答えになっていない部分があるかもしれませんが、以上です。

【阿部会長】

ありがとうございます。次に松橋委員さんお願いいたします。

【松橋委員】

先程大矢委員からもあったのですが、データの件はホテル協議会としてはおそらく出来ると思うので、協議会で集まって皆さんとお話して、定期的になると思うんですけど、すごくいい案だなと聞いていました。また齋藤委員の熱い話も、私もすごくその通りだなと思って、他の方から見るとこういう風な意見があるというのはすごく重要なことだと思っていました。私はこれとは少しずれるのですが、見ていて感じるのは青森市も函館市も十和田市も盛岡市も川越市も、八戸市と違うのは、ここの皆さんの熱量は観光であると思うのですが、八戸って工業都市なので、そこが観光に振りにくいというのをすごく感じるんです。街の構造、作りも、観光目線ではなく工業目線で出来ているので、どうしてもアクセスもトラック走行や、そういう部分なら便利かもしれない。観光目線ではない街づくりなので、ここはいますぐに変わるわけではないのですが、観光課だけではなくて市として工業と観光二本立てで行くんだとか、もっとすごい予算とかいろいろな考え方でいかないと、この人たちはもちろん観光を良くして盛り上げたいという気持ちはあるのですが、市の作りは産業都市ですよ。2、3日前デーリー東北さんにも載っていましたが、工業製品が東北で3番目。そのくらい工業のものを作っているとなると、我々は観光部会だから観光で八戸は観光だよ、でも一般の人は、あそこはたくさん工場あるよねというイメージかもしれない。そういう部分もあるので、なかなか出来ないとかではなく、やるんだけど、思った以上に他の都市よりハードルが高い部分はあるのかなと私は感じていました。それはそれとして、出来る出来ないかといったら先程皆さんがおっしゃったようにいろいろなたくさん良いものがあるので、例えばさっきの種差も観光地としていろいろやってくれるのであれば、いよいよ冬も動くのかなと思いました。我々とするとい場場所はもちろん前から知っていたし、それが商売として採算が合うか合わないかとなると、我々規模だとそう簡単に手を出せない。国が動いてくれて補助金出すとかいろいろ大きくやってくれるのであれば我々も乗りやすいしというところでは思っていました。すみません、生意気なことを言って。以上です。

【阿部会長】

ありがとうございます。それでは吉田委員さんよろしいでしょうか。お願いいたします。

【吉田委員】

齋藤委員からご指摘があったように、ゲートウェイとして八戸駅はそういうミッションがあると思っていますし、いろいろオーダーはあるんです。新幹線からの乗り継ぎを良くした八戸線の乗りでさえまだまだ低いので、まずそれを埋めたいわけですね。それを埋めて、種差往復のものを出すかというのであれば私も動くのですが、定期すら埋まっていない、はやぶさに接続した八戸線ですら埋まっていないというところがあり、我々のPR不足もあるのですが、はやぶさ何号で来てこれに乗ると種差に行けるというのがない。今ちょっと思ったの

が、久慈行というのがあるけれどあえて種差方面という言葉がなく、駅に降り立って種差の大きな写真があつて、でも改札を出ると久慈行とか、種差という言葉が切れているので、そういった情報もお客さんに出したほうが、種差海岸経由久慈行とか、それに特化して今後やっていかなければいけないなと今参考になりました。ありがとうございます。

今年、鮫と種差と階上種市が 11 月 10 日で駅舎が開業 100 周年、ある意味節目でもあるし、みちのく潮風トレイルの 5 年 6 年の節目でもあるということで再度八戸線のご利用を、トレイル含めて上げていかなければいけないというところで、八戸線の問題はあるものの活用を今後考えていけないといけない時期だとは思っています。生活路線だけに頼りすぎると当然バスも車も発達していますからそこに立ち向かうではなく、どう共存していくかという問題と、今松橋さんからあったように八戸の宿泊が落ちない、あまりにも減らないのはビジネス半分というところがある意味救いだと思うので、ビジネスプラス観光という、ビジネスの方に観光していただく、もしくは帰ってからまた来ていただくようなポテンシャルを持っていますよね。その方にインフルエンサーになっていただいて八戸はいいよと、たぶんビジネスの方は美味しいものを食べたり、見るかどうかは別にして、そういう情報は持っていると思うので、そういった方をうまく利用できればと思っています。前に私言ったんですが、観光で食っていくんだというところをつくる為には市民の方にどうやって情報発信をするのか、今これやってるんですよと、どうやって伝えるのか。よくあるのが、ここだけ盛り上がっていて市民は全然感じませんというのが結構あるので、そこを可視化じゃないですけど、数値で表すのがいいのか、おもてなしのキーワードのような、みんなで同じことを最低限ひとつ一緒にやるというところから始めるとか、そこを根付かせるのが最初かなと思っています。観光で食うのなら、そう思っていました。

VISIT さんとか会議所さんとかに観光の部門があつて行政との連携を別個ではなくて、もちろん一緒にはやらなければいけないのですが、具体的にどうやっていくのか、会があつて今度やりましょうねと、何を目指すのかというのをこの三者が本当に同じベクトルを向いているのかというところをすり合わせた方が、同じお金を使うにしても無駄なくやれるんじゃないかと思っています。

最後に、せっかく盛岡が 30 分圏内にあるのでその連携も、借りるものは借りて貸すものは貸しながらその交流を、交流人口を増やすという意味でもいいと思いますし、海外に今行きにくい時代に、私たちも西や南に行ったことがありますかという、なかなか行ったことがない方が多いので、インバウンドとは別に国内の宿泊者を増やすのも考えるべきではないかと思います。そういう意味では八戸弁をもっと売るとか、人を宝に売るとか、基本があつてそこにおもてなしをみんなでひとつやるとか、観光の部分が大事かなと感じています。八戸線は頑張りたいと思っています。

【阿部会長】

画面共有の方は大丈夫でしょうか。では高橋委員さんのほうからお願いいたします。

【高橋委員】

今日はこの間の議論から思っていて少し話をさせていただいたところでいうと、市民参加のシビックプライドとかひとつの視点としては来る人を呼ぶとなると住んでいる人がおもてなしをしていくときに自分の住んでいる土地を改めて見直すというのも、これから大事なんじゃないかと思っておりました。

ひとつ、自分も東京の深川の江戸の方に住んでいるのですが、新しい取り組みを、自分自身も面白いと思って参加したメタ観光というものがここにも合っているんじゃないかと思って今日は事例としてこんなものがあると出させて頂きたいとの、サステナビリティですね。先程から出ていた八戸十和田と種差海岸のトレイルという貴重な、自然の宝庫ですのでたくさん儲かるというよりは付加価値の高いものとして出していく、その二つを考えたいと思っています。

まずメタ観光がどんなものかという、お聞きになっている方もいると思うのですが、出来上がったものはスカイツリーのある墨田区で、切子とか金魚とか伝統的な江戸の下町というところなのですが、地図が出来ていて、一個一個見にくいのですがひとりひとりがここにいたという位置情報を記録して写真とか物語を紐づけるんですね。100人いたら100人の物語ができる。正解はなくて自分の感じたものがこうであるというものをどんどん溜めていって、プロフェッショナルが作る地図ではなくて市民サイドが作る地図が出来ていくというものです。右、ちょっと見にくいのですがタグがあって、自由にソートできるのですが、ここでいうと松尾芭蕉ゆかりの地はこの赤ですとか、鬼平犯科帳はここですとか、浮世絵で書かれた場所はここですとか、食べ物ですとか、いろいろと色で、ビッグデータなので自由に組み替えることができるんですね。墨田区に加え、我が町の江東区というところはこれでやってみて、参加するのは観光客ではなく市民なんですね。市民、住んでいる人が知っているとか生まれ育った場所のエピソードを出していくというのがポイントだったりします。

次のページに、教会があって、まだ訪れていないのですが、メタ観光とは近年生まれた新しい観光の概念で、GPSとGISで位置情報を活用してその場所が本来持っていた歴史的、今だと建て壊しになってこうなっちゃったけど看板だけ残っているととか壁の一部だけ残っているととか物語が残っているととか町の名前だけ古いものが残っているととか、それをこういう風に蘇らせるということで、縦串としての位置情報は縄文時代から変わらないので、そのときにこうだったというのが貫かれていて、その横にコンテンツごとだったりグリーンだったりヘリテージ、歴史だったり食だったり横串が持っている要素を多層的に切っていく、そんなものなんですね。スマホひとつで出来るというものになっています。

これが江東区でやったやつで、市民巻き込み型でメタ観光やってみませんかということで、面白そうだと思って行ってみたのですが、暗渠、あれなんだろうと気になっているものとか、電線が好きという人がいて、電線の写真を撮るイタリア人っているんですよ。電線が重なっているのがきれいでアートだということをまじめにやっている人がいて、あとどん突き、土木系だったり、壁、ひたすら壁の影で焼けちゃってこれ元ローソンだとかわかるやつとか、路上園芸とか勝手にバケツでやる人とか、オタクの文化が入っているんですけども、こういうものをまじめに自分の街にあるものを切り取っていくという感じで、実際にテレビで紹介されたんですが、レクを受けて、あなたは壁ね、とか、あなたはどん突きね、と班で分かれて1時間くらいフィールドワークをしてみんなで帰る。

もし八戸でやる場合だったら、東京は歴史ものが多いのですが、八戸らしさみたいなもので出来るかなと思っていて。八戸といええんぶり、歴史のあるものがあるので、いくつかの町内会で踊り手だとか子供たちがいるので、あそこにひとつひとつ物語が伝承されていると思うんですね。この道具はなんなのとか諸説あったり、さっき方言みたいなのがあったと思うのですが、方言みたいなところも、うんちくもあると思うので、いくらでもそれを掘り下げていく、この地域とこの地域の時代は同じことということでメタにしてみようとか、おもてなし期間としては観光客がたくさん来るので、その情報を食だとかお酒だとかも掛け合わせて、マップ上にはそういったものを見れるようにするとか、逆に観光客からも情報を加えられるので、来た人から見てどうだったのか、歴史を外から見た視点でこんなふうになっているみたいなものも出来るのかなと思います。まだこの紀行のほうは歴史もので伝統芸みたいなものに手を出していないと思うので、こういったものを一緒にやりませんかみたいなものを、先程齋藤委員が古くていいものが残っているとおっしゃっていたものを、この要素に入れられたりするのです。横丁もメタ横丁というと名前が面白いですし、古いものだと博多市でDX屋台みたいなことをやっていて、どこの屋台に行ったらいいのかわからないとなったときに、今これが入りましたとか、関サバが入りましたとか、今この屋台は3人入りますとか、市が情報をDX化して屋台の情報を観光客に伝えるというのをやって話題になっていたもので、横丁、古いものと新しいものを組み合わせるみたいなところで横丁の魅力をもうちょっと今の時代に合わせて、実はすごいんだよとしていく。あとは個人的な趣味ですけどアースダイバーという中沢新一先生が書いている、現在から古代がどうだったのか、縄文の古層にふっていくと神社の場所は意味があるんだとか、それも地図にしている。アースダイバーという本があって、右側が東京の僕が住んでいる湾岸地帯の方なんですけど、青いのが昔の縄文時代で全部海だった。ちょっとだけ残っている石みたいなところが岩盤の固いところでそこだけは海じゃなかったけど、調べてみると黄色いところが海と陸の決壊点みたいなところになっていて、神事が行われていて、今でもそこに神社が残っているというようなのがわかってきている。東京と大阪版というのもアースダイビングやっているんですが、縄文

といえば八戸というか、北東北、北海道だと思うので深堀をしながらこの土地はなんだったのかと、楽しく知的に遊んでいくというのもできるかなと思ってお話させていただきました。もう一個の方は次のページめくって頂いて、サステナブルツーリズムだけではお金は落ちないと河東さんおっしゃってましたけど、意識としては先週国際会議でサステナビリティ系の会議に出ていたのですが、間違いなく欧米は当たり前になっているので、お金を落とすというよりは市として綺麗な資源を残していくという方向をやっていかないといけないふうになっていると思っています。次のページをお願いします。

日本においても若い人の意識は高まってきていたりするので、同じ観光を選んだったら来るかもしれない。次のページをお願いします。

脱炭素の、実際先ほど飛行機に乗ってきたときにどうオフセットするかとか、その土地で地産地消が出来ているみたいなのところも入ってきますので、八戸の中でも観光事業者さんが、気候が暖かくなって花鳥風月が見れなくなってしまう、食が取れなくなってしまうということを課題として捉えて、身の回りの観光業で出来ているところからどれだけ炭素を出さないか計測できるものがありますので、それをあえてトレイルまわりではやってみるというのがいいのかなと思いました。

次のページで、さっきの日本版の河東さんが取られているゴールドのやつの先にはこのGSTCというグローバルなところがありますので、ここを目指していくみたいなのところも面白いのかなと思っていました。シンガポールのセントーサ島とか GST を取って価値を上げたという例なんですけど、ここまで行くにはハードルが高いと思うのですが目指すべきはこういう高い所、特にトレイルに関していうと、次のページにバイオームという、ご存じかもしれませんが、来年の大阪万博と一緒にやって、この前の生物多様性国際会議というのにこの前行っていたのですが、日本発の京大発のベンチャーなんですけど、スマホでこれなんなんだろうというのを撮るとビックデータに、動物図鑑に入っていってこれですというのがわかる。これが地図で散らばっているというふうになっていたり、もともと絶滅危惧種なのかわかるようになっていて、トレイル周りでは花鳥風月のこれをトレイルに行っている人や住んでいる人に撮って貰ってこの生態系の豊かさみたいなものをみんなで可視化していく、環境省さんも一緒にやっていくみたいなのをやってもいいかなと思っています。

私の場合はこういうツアーも始まっていたりもするので、旅行会社さんでもグリーンジャーニーとか、日産さんでは電気自動車を出してということも始まったりしているので、意識の高い方に最初にツアー組んで八戸に来てもらう、メディアと一緒にやるみたいなのも面白いかなと思っていました。以上になります。

私は外の立場でどうやって儲けるんだという視点がないので申し訳ないのですが、今日あげた議題の中でいうと、市民が、住んでいる人がどうやって自分の持っている場所の魅力を感じるか、そちらの観光の視点、それを持っていると迎え入れるというところもいい交流がで

きるかなと思ったので紹介をさせていただきました。

【阿部会長】

ありがとうございます。ここからはオンラインで本日まで参加いただいている委員の皆様からのご意見をいただければと思っています。先程ご説明もいただいたのですが、河東委員さんのほうからよろしくお願いいたします。

【河東委員】

わかりました、ありがとうございます。そうですね。今出ている案のところでこれから肉付けがされてくると思うのですが、八戸らしさというのが今ある案にプラスしてもう一本あったほうがいいかなと感じています。せっかく八戸、朝市もあれば夜もすごい楽しいじゃないですか。朝も夜も楽しめると宿泊に繋がりますから、こんな素晴らしいコンテンツがあるところは東北内でも少ないと思います。そこをもっと出すべきだと思いますし、トレイルのゲートウェイであり帰着点であり、すごい場所なのかもしれないですね。今のままですと、八戸じゃなくて別のところの名前でもそれっぽくなってしまうので、八戸なんだなというところをぜひ入れたいですね。サンプルに出ている川越は東京に江戸が残っていないので小江戸というのを常に出しているんですね。安藤広重にあるような絵は川越に行かないと無い、そういう日本の文化を見たいという人を、高付加価値な人を呼び込みたいという願いからああいう設定をしていたりします。どういう人を呼び込みたいというのが入る、八戸らしさ、ずばりこれというのを出せなくて申し訳ないのですが、そういう要素を入れていくべきかと思います。以上です。

【阿部会長】

ありがとうございます。続いて村山委員さんお願いいたします。

【村山委員】

こんにちは、やまところの村山です。

私からは大きく3つお話できればと思います。他の委員の皆さんと重複する部分もありますが、できるだけ違う観点でいければと思います。

まずひとつ目は、町田委員からあった、全体図の中でどこまで決めていくのかという話で、今現在進行形で神奈川の川崎市の観光ビジョンの策定の委員をさせて頂いたり、過去には福井県とか静岡県にも関わらせて頂いたのですが、そういった観点でいうと今回ビジョン、数値目標を決めるということだったのですが、河東さんの話にも近いのですがターゲットですね、どうありたいというビジョンの中でターゲットをどこに、どういった方々を呼び込むの

か、例えばインバウンドなのか日本の中でも若年層、若い方を狙っていくのか、ファミリー層なのかとか、その辺のありたい姿を描いた中でターゲットって見えてくると思うんですね。ターゲットはひとつじゃなくていいと思います。メインのターゲットはここだけどサブターゲットはこことか、そういったターゲットの話です。あとは具体的なアクションプランですね。そのターゲットを呼び込むためには宿泊施設を増強しないといけない、先ほどのバスに種差海岸行きを作らないといけない、具体的なアクションプランまで今回の6回の委員会で描くのかとかその辺の体制をどうするのか、ビジョンとターゲットとアクションプラン、体制、そのあたり全部を描くのかどうなのかというところ、少し整理いただけるといいのかなと思いました。

ふたつ目は今回の質問というか、投げかけて頂いているビジョンと基本方針のところなんです。私八戸ならではの要素を入れたらいいと思っています。今あげて頂いているポイントは基本的な持続可能な観光とか儲かるとか域内調達率とか市民の方の幸福度とかそれはとてもいいと思いますし、ぜひ入れ込んでいただければと思うのですが、それをひとつの言葉でまとめていくときに八戸ならではのキーワードを入れた方がいいと思います。私が考える八戸ならではのキーワードは、皆さん出たんですけど、食と自然と交流、この3つだと思っています。食に関してはまさに横丁もそうですし朝市もそうですし、食というところはぱっと八戸と聞いたり行って他の方にお話するときに食の話を必ずします。あと自然、世界的なみちのく潮風トレイル、世界レベルになってきたのでその起点というのは大きいと思います。3つめの交流、朝市で驚いたのは地元の方もすごい行っていますよね。地元の方が毎週行くみたいな、巡回しているような感じで行っている人もいますし、会いたい人に会うとか、そういう感じで、外の観光客だけではなく地元の方が足を運んでいるところに外の方も入らせて頂くとかそういうところもあって、そこっていわゆる交流にも繋がっているのかな。横丁も色々な交流が促進される空間ですし、交流というのはひとつ八戸のキーワードとしてあるのかなと私自身も感じていますし、プリンスみたいなバーにみんな必ず行くというところもあれば、今はなくなっちゃった鈴木さんがやっていたせんべい喫茶とか、おじいちゃんおばあちゃんの交流もあってそういうのも含めて交流というのは八戸に何度も行かせて頂いた中で感じているキーワードです。食、自然、交流、この辺りを織り交ぜた形でビジョンを描いていけるといいのかなと思っています。いろんな方々の意見もどんどん出しながら、特に地元の方とか、他の地域でのパブリックコメントとか周囲の方から意見を頂いてそれでどうだということを確認いただくようなプロセスも、今回も取るのかもしれませんが、取っているところも多いと感じています。キーワードが出ると、食と交流っていうキーワードが入っているとすれば、八戸で食と交流に絡めた体験のアクティビティを増やしていくとか。町田さんが種差海岸でやられていますけれども、漁師さんとの接点を提供するような食体験というのもあったりしますし、キーワードとして掲げるものとアクションが関連してくる。

そういった落とし込みが大切だと思っています。高橋委員もおっしゃってましたがデジタルを絡めてもいいのかなと思います。今八戸市のデジタル推進も動いていると思うのですが、そういう、デジタルを通じて発信というのもカギになると思うのでそのあたりも織り交ぜてもいいのかなと思いました。

最後3点目は効果測定ですね。数値目標にも絡んでくるのですが、市民の幸福度とかも入ってくるので、そのあたりは数値目標としてアンケートを取って満足度を、あるいは観光に関しての前向きな姿勢をとるとか。そのあたりの市民目線での定例的な効果測定というのも大切だと思いました。

最後にリアルタイムでの宿泊施設での情報とかデータを収集するという話がありましたが、福井県のDMOは芦原温泉とかいくつかのエリアなのですが宿泊施設にPMSをつないでリアルタイムでデータが取れるようにしていたり、むこう3ヶ月の予約状況がわかる。それを地域にオープンデータとして共有して、行政だけでなく民間企業がそれによってシフトを考えたり仕入れを考えたりみたいな、そんなことに使われています。そこまでリアルタイムにいかなくても京都市とかは月次で、京都市って宿がたくさんあるのですが、大きなところ協力して月次で情報をオープンで共有するとかそういうサイクルを自前でまわしていたりします。その辺のデータの取り方とか、他の地域でどうやっているのか、私も観光DXの事業でいろんな地域に関わっているので個別のミーティングの時にも含めて共有しながら、効果測定、どうやって数値目標を決めるのか、効果を追っていくのかの観点で、またお話できればと思っています。以上3点でした。ありがとうございます。

【阿部会長】

ありがとうございます。それでは渡辺委員さんよろしくお願いいたします。

【渡辺委員】

東北観光推進機構の渡辺です。よろしくお願いいたします。

各委員の皆さんから勉強になる、私が言おうとしたことも言っていただいてキーワード結構出てきたかなと思います。私からは基本方針の3つのことですが、同意でありますけれども、これは大きな目的ということですので、各委員の皆さんからあったようにここから八戸らしさとか、具体的に何を誰に売りたいか、どのようにして売っていくのかというのが次につながる施策ということでこの3つがあると承知しております。その中で概念的なところでひとつ加えて頂きたいキーワードとしては、人材育成というキーワードは公示の所の部分で理念として掲げていただければと思います。人材育成、担い手づくり。やはり魅力的な観光地であってもそれを持続的に担う若い方、あるいは現役の方の観光事業者の中の担い手、街の全体のビジョンを作っていくVISITはちのへさんのような、DMOの中で継続的にある方

というのが地域に求められるわけですので、人というところ、担い手という視点はどこかに理念的なところで捉えていただきと思います。それがひとつです。

二つ目は、旅行者と住民の方の、これも各委員の皆さんから出ましたが、ここの部分がこれからの観光にはこれから持続可能な観光、サステナブルもそうですが、最近言われているレスポンスブル・ツーリズムですね。責任ある観光、そういうところも重要になってくると思います。オーバーツーリズムでいろいろと一部地域では観光客が多すぎて市バスにも乗れないとかというところもありますが、八戸にとっては市民の方が観光客の方をウェルカムな気持ちでお迎えする、継続的な意識として根付いていく。そのためには観光の街における、経済における、生活における貢献度、寄与度みたいなものを可視化するということが正しいかなと思います。その測定の仕方は各委員の皆さん、私もですけど、他の地域の事例なども含めて、考えながらここはやっていければと思います。

あとは富裕層、高付加価値化をして地元にお金を落として頂く、地域の域内調達率を上げていくという視点であります。この中でアドベンチャーツーリズムに力を入れておりまして来年これは青森県の齋藤部長にもご助力いただいて東北6県アドベンチャーウィークという大きな事業を実施できることが決まりました。これは来年の秋になるのですが、我々のほうでみなさんと作ったコース、当然八戸は種差海岸、これはぐるっと回って秋田のほうからまたぎの文化を体験していただきながら太平洋側にはいるところで八戸に寄って、種差に寄って、みちのく潮風トレイルを南下していく、というようなモデルルートになっています。いろんな形でゲートウェイ、結節点になるのが八戸だと思います。

そんな中、先だってアドベンチャーワールドサミットというのが中米のパナマであって、私行かせていただいたんです。その中でアドベンチャートラベルの世界組織の方とお話をする中で、求めているものはその土地ならではの特別感ということがあるんですけど、もうひとつは日常のお裾分けをしてほしいというんですね。そういうことが、ここでしかないという魅力であり、旅行している人間がそこで自己変革、新しい気づき、こういうバックボーンでこの土地が古代から、あるいはこういうところでこういう食事ができたんだと知る機会になるので、有名観光地でなくてもどこでもあるわけで、そういったものが東北にあるといいんだよなという感想をいただきました。そういう観点からすると、住民の方と旅行者の接点って朝市とか横丁、朝の銭湯とか、八戸はそういうところが宝庫ですよ。そういうところを磨き上げていってアピールしていくとなると、これがひとつ八戸の新しい強みになると思いますので、今まで皆さんがおっしゃっていただいた市民の参画、市民の寄与度、いろんな旅行素材で種差海岸とか是川遺跡、これを売っていこうという中で、市民がどう関わって、さらにそれをストーリーとして今後必要じゃないかと思った次第です。それはこれからどういうふう施策を作るかというのを議論する中で必要かと思いますが、直近として気づきがございましたので紹介をさせていただきました。以上です。

【阿部会長】

どうもありがとうございました。それでは井上副会長さんお願いいたします。

【井上委員】

すみません遅れて失礼しました。

委員の皆さんのご意見、その通りかなという形になっていると思います。確認なんですが、ビジョン、目指すべき姿というところを策定する際に、民間企業時代にいやというほど見てきたのですが、強みとか価値を言語化する、その中で何を売りにしてやっていくのかというところから、その中で実際にビジョン、キャッチコピーというふうに決まっていくと思いますので、キャッチコピーは最後になると思います。実際に強み、価値というところはこれまでの委員の皆さんから具体的な話も出ていましたし、既存のデータもたくさんあると思います。VISIT はちのへが設立する際にそういう会に参加したことがあるのですが、その際にも八戸の観光資源というものが表に出ていると思いますので、そういったものを有効活用して、会議の回数が増えたのであればまずそれを場に出してみてもそこからどういう観光振興プランを作っていけばいいのか、最後に目指すべきことが言語化、キャッチコピーという形でいいんじゃないかと思います。

次に、各委員の皆さんの意見にあったのですが、方針にあるように3、4とか八戸の生活文化そのものが観光になっていくんじゃないかと思いますので、そうすると当然住民の皆さんの受け入れ態勢が必ず必要になってくると思います。プランの中で住民の参加、意見を求めるような、どんな人がどれくらいというのはカギだと思いますが、そういったものもでてくるのかなと思います。プランもどこまで具体的にするのか、抽象度をどれくらいにするのか、今後委員の皆様と議論していけばいいんじゃないかなと思います。以上です。

【阿部会長】

委員の皆様からいただいたんですけど、最後に私から。特にたくさんいただいたのであれなのですが、VISIT はちのへも統計データとかさまざま取って提供していますので、特に宿泊の部分でも統計を出して国内の宿泊とかインバウンドの宿泊者も各それぞれの国別で出しているのですが、さらに深掘してどういうものができるのか、観光課さんとも相談しながら進めていければと思っています。あとは目指すべき姿のイメージ、委員の皆様からお話もあったのですが、八戸市は産業という部分でもカーボンニュートラル、脱炭素実現を目指して産業でも取り組んでいるところです。そういう意味では、観光面に置き換えると国立公園では脱炭素化を進めているところはそれぞれの個別のエリアにおいてゼロカーボンパークという指定がありますので、ここの種差海岸もサステナブルツーリズムに繋がるように、

脱炭素、カーボンニュートラルというのを意識し観光面でも取り組んで、環境省の方からゼロカーボンパークというのをいただくと、インバウンドとか欧米から来る方へ対しても、国内も含めて印象が違うのかなと思っていたところでした。

ちなみに三陸復興国立公園でゼロカーボンパークの指定を受けているのは宮古市さんだけになっているので、ぜひ八戸市もそれをとれる取り組みができればと思っていました。そういった意味で核となるのが種差であれば、自然プラスさまざまな体験、文化、そういったものを組み合わせたアドベンチャーツーリズムということになるので、この計画が5年間ということで策定することになっていますので、5年というのを踏まえた中でどこの部分を核の観光におきながらアドベンチャーツーリズムというところで八戸の持っている歴史であったり文化、体験に繋げるのはどうかなと思っていますところでした。私からは以上となります。

ここの3、4について委員の皆様からご意見を伺いましたけど、追加で何か委員の皆様からこれはお話ししたいということとはございませんでしょうか。よろしいでしょうか。オンラインの委員の方もいいでしょうか。

それでは続いて、5番の前談部分に関係するかもしれませんが、データについての意見について事務局の方から意見をお願いいたします。

【事務局】

左上に5とついた「第1回観光振興審議会で出たデータに関する意見について」という資料をご覧くださいなのですが、第1回のときにデータに関して委員の皆様からお話あったところピックアップさせていただいた資料になります。そういった中でデータが足りないというお話いろいろ頂いた中で、こういったデータはすぐに取りれるものなのか、来年度に向けて新たに取らなければいけないのか、改めて確認させていただきたいと思い、こういった資料を作成させていただいたものです。上の方から順に確認していきたいと思ったのですが、大矢委員さんから前回データのお話頂いていましたけれども、先ほども宿泊者のデータの取り方というところでお話いただいて、そういったところになるのかなと思うのですが、改めてこういったデータがあればいいんじゃないかというところお話を伺ってもいいでしょうか。先ほどのホテルのデータの話でよかったですかね。

【大矢委員】

属性というところ、どこまでやるのかというところはあるのですが、やはり興味を持ってどこまでの属性を取るのか、その枠組みを決めていくのが必要かなと思います。

【事務局】

データの取り方としては、宿泊施設のほうで、宿泊される方へ、どこから来たかとかどうい

ったものを見に来たのかこちらから協力をお願いしながら取れるところを取っていくというイメージでよかったですかね。

【大矢委員】

それに加えて主要観光スポットのところで、工夫が必要ですが、情報を取れるような取り組みですね。

【事務局】

松橋委員さんのホテル協議会のほうでもできるところがあるかもしれないというお話もあったので、そういったところもホテル協議会さんとか含めて改めてそういったところでご協力いただけるかお話させていただいて相談したいと思いますので、のちほどご協力をお願いしたいと思います。ありがとうございます。

続いて河東委員さんのレールパスを使う外国人の方がどれくらいいるのか、というお話を前回いただいたのですが、八戸に来た外国人の方でどれくらいの方がレールパスを使っているのかということだと思うのですが、現状としてはこれに関するデータは市としては持っていなかったのですが、取ろうとするとアンケートで取るのか、人流データから推測してやるのかというところになるのかなと思いますけど、改めて河東委員さんからこのことに関してお話を伺いしてもよろしいでしょうか。

【河東委員】

すみません。そのときは思いつきで言っていましたが、JR さんでデータ出してないですもんね、そのあと確認しましたら、難しいんですね。すみません。

【吉田委員】

改札口でやりますか。ちょっと考えます。

【事務局】

人流データなどで推測できるものなのか、八戸市としても 12 月から携帯の人流データを 3 か月間見られるものを契約することになっていましたので、人流データを見ながらそういったところも見てみたいと思いましたので、その結果をのちほどお知らせしたいと思います。続いて高橋委員さんのほうから交流人口のところ、幸福度が上がるところのデータの取り方に関してのお話をいただいていたのですが、このことに関してお伺いしてもよろしいですか。

【高橋委員】

これはやっぱりユニークな、朝市でも「イサバのかっちゃん」とか元気な方々が、前向きにいる気持ちだとか、岸壁での朝市もそうですし、お祭りでも踊っている子どもたちとか、いいデータが取れると思うのでそこをちょっと環境と掛け合わせて、前向きな気持ちとか八戸に住み続けているプライドとか取れるようなものを、さっきいただいた資料のJSTS-Dの取り組みの中に住民の前向きな気持ちというのが資料としても入ってくるので、横丁とかでも取れると思いますし、市民の方の、自分たちがおもてなしをしていくというところがコミュニティに繋がっていく。もしかしたらオーバーツーリズムみたいところで来ちゃっている人もいるかもしれないので、その辺を取っていくとビジョンのところ、交流と人というのが出てきたり、ユニークなデータになるんじゃないかと改めて今日感じました。

【事務局】

市民に対するアンケートで取るような内容ということですか。

【高橋委員】

どっちがいいんでしょうね。コメントでいいのか、取り方も工夫が必要だと思うのですが。メタみたいなのがあると参加率という物理的なところが取れるかもしれないので。

【事務局】

わかりました。その辺もまた、今すぐどうというわけでもないで、どういうやり方がいいのか相談していきたいと思います。

【阿部会長】

時間もありますので、オンラインの村山委員さんと渡辺委員さんから先にお願いします。

【事務局】

先に村山委員さんのほうから、前回外国人の八戸市の認知度とか何を見て知ったのかとかその辺のデータがないというお話を伺っていたのですが、市としてはないのですが、今後やろうとすると来た方を対象にアンケートを取っていくとかそういうようなイメージでよかったですでしょうか。

【村山委員】

そうですね。今VISITでやられているものもあると思うのですが、母数が少ないと思うので、もう少し宿泊施設あるいは観光案内所さんを含め、連携した形でボリュームを取っていけるような、仕組みづくり、計画というか市の方向性としてもインバウンドどれくらい力を入れ

ていくのかというところも関連してくると思うのですが、そのビジョンづくりから関連してくると思うので、落とし込みのところをもう少しうまく連携しながらやっていけたらいいんじゃないかなあと思っています。もう少しボリュームを増やしていくというところ、取る項目、この2点かなと思っています。

【事務局】

これも VISIT とも相談しながら、数が少ないと聞いていたので、もっと多くの人に協力してもらえるようなやり方とか場所とか、改めて相談してアンケートをとれるように改めて考えていきたいと思います。ありがとうございます。

続いて渡辺委員さんのほうから、市民との共感とか観光消費額、域内調達率とか、観光にどれだけ寄与しているのか可視化に関する数値に関する意見をいただいたのですが、改めて意見お伺いしてもよろしいでしょうか。

【渡辺委員】

まさに、まず市民に観光に共感をいただくために、地域経済における貢献度を可視化するためにも観光消費額とか域内調達率というのは出すべきだと思うので。どういう形で測定可能なかはすみません私の勉強不足で最適解を見つけていないのですが、ここはなんらかの方法があると思いますし、JSTS-D の中にも観光による経済効果の測定というがあるので、他の地域にも事例があるのではないかと推測するので、あるいは雇用機会の喪失みたいな項目もあるので、この辺は是非可視化をする、そして住民の方に観光に関する意見、アンケートを頂いて拾って回していくということが必要かと思います。

あと先ほどジャパンレールパスの河東委員からの話、ジャパンレールパスではないのですが、先ほどの人流動態という部分でいうと東北観光推進機構紀行の東北観光 DMP で、今年度から今まで東北域内の動態だったんですが、今成田空港、羽田空港、東京駅、新宿駅、関西国際空港、新千歳とか、域外のゲートウェイからどれくらいの方が八戸に来たかというのが取れるようになりました。まだ精度がどうかというのがあるのですが、今年度から出来て、昨年度のデータと今年度の比較というのは今日時点だと1月から6月までの半年間見られるようになっています。VISIT はちのへさんからも抽出できるので、信用度が100%ではないのかもしれない、今検証中ですけど、イメージが見られるようになりましたけど精度をあげて今後何かの参考にできればと思いますのでよろしくお願いいたします。

【事務局】

ありがとうございます。東北観光 DMP のデータについては VISIT はちのへと一緒になって改めて調査してみたいと思います。観光消費額とか域内調達率というのは他都市での事例の

出し方を勉強して、こういったふうに出しているようです、と次回の会議でお示しできればと思います。ありがとうございます。

【村山委員】

すみません、4時で次の会議に出ないといけなくて。

【阿部会長】

オンラインでご参加いただいた委員の皆様、ありがとうございました。会議のほうはここで退室となると思いますが、またよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【事務局】

戻りまして、中盤のところ、町田委員さんからの前回の意見で消費額に関する意見、宿泊費、飲食費、函館市さんとの比較とか河東委員からのご意見があったのですが、市の、VISIT の調査で体験料が 1000 円もいかないというところのお話があって、そういったところを整理してプランを考えるとところがあるのかなという意見を伺っていたのですが、そういったところについて改めてどういった内容なのかお伺いしてもよろしいでしょうか。

【町田委員】

こういったデータって、すごく矛盾しているんですけど、あれば助かっていろんな考えることのもとになるのでデータは必要なんですけど、消費額とかの数字を見てもどこまで信憑性のあるデータかなと感じるんです。例えば取る場所とか人とかによって、消費額ってまったく変わってくると思うんですね。たとえば 1000 円くらいで何かできる所で、たくさん人が来るからデータを取って消費額これだけですと言っても説得力ないよなと思って。今すごく高付加価値なコンテンツを作りましょうとか、そういうのが言われていますけど、そういった価値、費用対効果、どれだけお金を出しても普段体験できないようなコンテンツを作っていきましょうとか、そういう考えもある中で、そういったところでアンケートを取るとこういう数字ではないと思うので、ここの消費額に関してはどこでデータを取るとか、その平均値なのか、信憑性がないかなと。このデータを元になるとコンテンツが作れなくなってしまうとか、気にしないでやる人はやるんでしょうけど、もしこれから観光やっていこうとか、こういうものをバンとプランを作りましたと打ち出したときに、こういう感じのデータが出るとモチベーションが下がるかなというのもあるので、この消費額に関してはデータの取り方・取る場所・機会を再度考えていただいたほうがいいかなと思います。

【事務局】

ありがとうございます。

井上副会長さんのほうから八戸はどういうところを目指して何を実現させるのかと、取捨選択して強いものを伸ばす、冬期の閑散期の話とか、そういった議論をするためにデータが足りないという話をいただいたのですが、そういったところの話を進めるために、改めてこういうデータがあればいいのではないかと等、そういったところをお伺いできればと思いました。

【井上委員】

1 回目の会議のときに示されたデータというのは観光に関するデータだと思いますので、すべてを網羅しているわけではないと思います。実際、既存でどんなデータがあるのか細かくなくてもいいのか一覧でもあれば、こういったものがあってこういったものがないのかわかるだけでも今後の対策ができるのかなと思います。八戸ならではの強み、価値を見つけていく上では、観光以外の調査とかデータも必要になってくる可能性もあるのかなと思います。住民の意識調査とかであれば、今、政策推進課のまちの魅力委員をやってますけれども、そういうのも取ったりしますので、住民が誇れるものは何かとなったときに蕪島、種差と出ると思いますが、そういったものもどう使えるのかどうかも含めて検討できればと思っていました。こういったものがあるのか、まず分かればいいと思います。

【事務局】

一覧のデータを次回までに準備して皆様にお示しできるようにします。ありがとうございます。確認は以上です。

【阿部会長】

それでは続いて次第の6になりますがその他に進みたいと思います。本日の審議内容に関する事でも、今後こういうことをやっていきたいという具体的なことでも結構ですが、その前に事務局からその他で何かありますか。

【事務局 下村次長兼観光課長】

まず、皆さんにお渡ししている資料の中で、参考資料で触れられなかったものがあるので簡単にご説明いたします。先程私も少しふれましたけど八戸十和田トレイルに関する資料が2枚ほど付いております。今月はシンポジウムも行うということで、八戸十和田トレイルとみちのく潮風トレイルが繋がったことによって、先ほど齋藤委員からもありましたが、当初青森県ゆかりの大町桂月でいくと、本来種差海岸を十和田の国立公園に入れたかったけれども距離があって、それが地上で結ばれる中でいろんなストーリーが生まれるでしょうし、メタ観光という観点で非常に面白いことができるのではないかと思います。ロングトレイルに関

しては東北観光推進機構の渡辺さんからも意見を頂いているので、ぜひ八戸十和田トレイルに注目して頂きたいというのがひとつと、CO2の話やサステナブルな観光の話につきまして脱炭素ですが、深層社会の実現について市の方の取り組みも本格化してきています。八戸十和田トレイルのことにに関して奥入瀬溪流のほうでもいろいろな取り組みをしていますが、具体的に種差海岸でも実現していきたいと思っています。また脱炭素については吉田さんのところのJ Rも協力していただき、しつこくまた相談していきたいと思っています。事務局からは以上です。

【阿部会長】

その他、委員の皆様から何かございますか。

【齋藤委員】

もう時間があれなんです、いっぱい言い足りなかったの。

みちのく潮風トレイルはたぶん八戸にとってはものすごいお宝で、認められる前から何度も歩いて大ファンです。ただ、実はやらなければいけないことがいくつかあって、ひとつはトレイル開発をしなければいけない。どこで何の写真が撮れるのか、人とどこですれ違えるのか、何がここは良いところなのかということについて深堀をしていく必要があることと、先ほど皆様が言っていたようにターゲティングをしなければいけなくて、エデュケーショナル、子どもたちを連れていくのであれば何を伝えればいいのか、連れてきた小学校の先生たち用の教材だったり子ども用の事前の教材だったりエデュケーショナルというのはそういうことですし、それからラグジュアリーの人たちより先にやらなければいけないのは、今来ている人たちにもっと満足感を与えていく必要があって、なるべく早いうちに耳栓でいいのでガイドがいるなと思っています。もう少しちゃんとしたガイドをつけたいみたいな話もありますし、いろんなターゲットがたぶんいるんだと思いますが、とりあえずやらなければいけないのは耳でいいのでガイドをつけていくこと。ここが八戸で一番、オーバーユースになってくる場所だと思います。そうなるとどうなるのかというと、一方通行の話だったりすれ違いの場所を作ったりいろんなことになってくる。じゃあいったいオーバーユースはいつくるんだ、オーバーユースを危惧しているよりもあそこにオーバーユースになるくらい人を入れたいというのが正直なところ、そのためには我々がしなければいけないのはあそこにデジタルカウンターをいれなければいけない。遊歩道に頻繁にデジタルカウンターをいれるべきだと思います。その数字がどこまでふればオーバーユースなのか、一方通行がいいのか何をしていくのか、次の手を考えながら、あそこにたくさんオーバーユースにならないようにお客さんを入れていくことが必要なんだと思っています。数じゃないと私も重々承知ですが、満足感の高いお客さんをひとりでも多く入れていけるように歩く数とクオリティーと、ある程度の

人数が来ればさらに上の三角のてっぺんを狙っていただけます。あそこで稼ぐためにやらなければいけないことがあって、私は今日ここに来る前に午前中、観光開発・コンテンツ開発のディスカッションを県庁の中でやっていて種差の話をずっと朝からやっていてその勢いでここにいるんですけれども、そこで、やったらうれしいこと、やったら外国人にも日本人にもうれしいこと、あそこでドローンを飛ばして写真を撮る事、つまり遊歩道の中でドローンを見ながらこんな手を振ってるやつを写真撮られて、Wi-Fi か何かに結ばれている人たちに写真を 500 円で売る、これがすごい良いこと、忘れられない思い出になってディズニーランドのスプラッシュマウンテンでジャンプしているときに写真を撮られる、そういう絵をみんな求めていて、あの絶景の種差海岸の遊歩道で自分たちが仲間という絵、そういったことを次にやっていければいいなど。まずはあその中に Wi-Fi を入れたり、それからデジタルカウンターを入れたり、オーバーユースのための対策を考えたり、そういうことを次から次へやっていく。何歩歩けば何が見えて、どこから写真を撮ればいいんだ、朝がいいのか夜がいいのか、みちのく潮風トレイルがどんないいものなのかをもっと深堀していく必要があって、私が 20 代のときに深久保にいくと、深久保の漁港のところではブルーシートでウニを剥いていて、そこを歩くとウニ剥きのおばちゃんが食べていけて、いつ行けば何があるのかそれが大事で、私たちはラグジュアリーの反対でエコノミーと呼んでいましたけど、そのエコノミー層の人たち、誰の手も借りないでただなんとなく楽しいところだと聞いたから来た人たち、あの人たちにまず最高の満足感を与えていくし、あそこがもっている本当のバリューを深堀していろんな形でお伝えしていく。なるべく早く、それを英語で、韓国語、台湾語で、早く入れて欲しいというのが我々の切なる願いです。そしてさらにガイドの育成だったり、人がくればガイドが欲しい、ラグジュアリーな人たちがもっと望めますのでそこにしっかりコミットしていければいいのかなと思っていて、やれることから順番にぜひやっていったらどうでしょうということで、言い足りなかったことでした。

【町田委員】

時間がないのに申し訳ないのですが、今齋藤委員がおっしゃったときに、私もこれだけは言っておくと思っていて、それがオーバーラップしているんですが、みちのく潮風トレイルと十和田のトレイル。もちろん私もみちのく潮風トレイルが出来る前に道の選定から関わってきていますので、基本トレイルラブですということが前提のお話で、でもトレイルというのは魔法ではないのでトレイルがあるからというような捉え方をしないでくださいと言いたかったんですね。トレイルは道で、やっぱり観光としてそれをとらえて、稼げる観光にしていったり魅力的なものにするためには「トレイルありますよ」「自然でトレイル」だけでは伝わらないですし、持続可能なものにならない。それだけだと衰退していきますから、大事なのはトレイルを保全もそうですしバランス良く利活用していく。利活用がす

ごく大事で、稼いでいかないとまたそこも衰退していくので。そこも齋藤委員がおっしゃったようなコンテンツがどんどん生まれていかないといけなくて、でも本当に経験上その部分をする人って本当にいないんです。そこが人材育成にもつながっていきますし、そのアイデアとノウハウ、ビジネスを持続していかないといけないので、それがあってこそそのトレイルであって、トレイルが宝ではあるのですが何もしなければ宝にはならないんですということがわかる内容で活用してくださいね、というのを私はとても言いたかったんです。その具体的に例えばこういうことですよというのは齋藤委員がおっしゃってくださったことだと思うので、その取り入れ方、表現はとても重要だと思います。

最後にひとつだけ、ちょうどバイオームの話が先ほど出まして、トレイル上でバイオームさんのプログラムを使って今2ヶ月投稿期間を募集して600、700件弱投稿があって、その分析とかデータを出したものの勉強会があって、それでトレイルを歩こうというのが11月23日にあります。以上です。

【事務局】

カウンターは今環境省が2ヵ所。ただ手押しカウンターを2ヵ所置いています。ただその他に当方でデジタルカウンターを実は主なところに置いていました。葦毛崎展望台からのトレイルのコース、淀の松原から出てくるところにデジタルカウンターを置いておりまして、主要なトレイルのキロ数は12キロなんですけど、蕪島から種差までの12キロの間に2ヵ所置いているのでそのデータで見ているというところです。だいたい2万6000からというところを推移しているというところですが、コロナ渦から、やっとコロナ前までは回復している状況です。何をみてオーバーユース、その人数がどのくらいいけばオーバーユースになっているかという判断をせざるを得ないかと思いますが、オーバーユースになるまで頑張らないといけないというところです。

【事務局】

趣旨としては絶対数は足りないのです。

【齋藤委員】

そうですね。一番いいのはどっちから何人来ているのか、起点が葦毛崎だったら葦毛崎からどこまで行った人たちが全体の何割なのか、そういうことを、デジタルカウンターを細かくしていくことで補足ができないかという議論を是非してほしい。それができれば2時間コース、4時間コース、1日コースみたいなことをもっと機動的にできるし、その時間をもっと意味深いものにできると思うので。あとはデジタルカウンターを速やかに情報収集できて活用できる人材をどんどん成長させてもらえればフィードバックができてくる。

【阿部会長】

その他委員の皆様よろしいでしょうか。

本日の審議は以上で終了したいと思いますので進行を司会の方にお返ししたいと思います。

【事務局】

皆さん、ありがとうございました。会議は以上となるのですが、次回の会議についてお知らせいたします。今のところの予定なのですが、12月18日水曜日から20日の金曜日のいずれかの日に開催したいと考えております。近々、出欠についての確認をさせていただきたいと思いますので、その上で日程を決めていきたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

これを一つの柱にして、第4回目もメールで皆さんに大体の日程は、市役所内部のスケジュールも確認した上で、すぐさまお知らせしたいなと思っておりましたので、毎回の参加が厳しくとも、できれば3回、4回のどちらかにはまたご参加いただけるように、早め早めにスケジュールの方を提示していきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

本日、委員の皆様方からいただきましたご意見につきましては、今後のプランの策定の参考とさせていただきますので、引き続きよろしくお願いいたします。以上を持ちまして、第2回八戸市観光振興審議会を終了といたします。長時間にわたり、大変ありがとうございました。